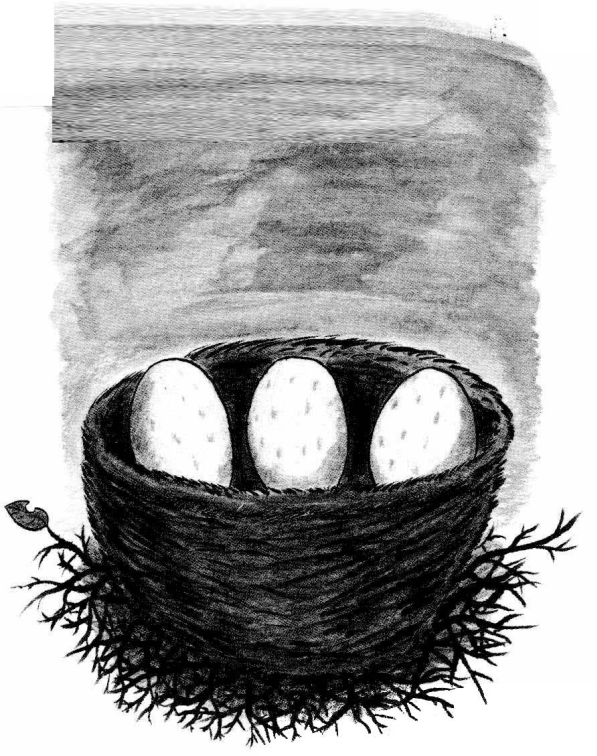
親とたたかう

菅 龍一

ちくま少年図書館 95
社会の本



親とたたかう

菅 龍一

ちくま少年図書館 95
社会の本

289／親とたたかう

著者略歴

1933年高松市に生まれる。少年時代を山陰の禅寺で過ごす。京都大学理学部卒業。『女の勤行』で岸田戯曲賞受賞。『善財童子ものがたり』でサンケイ児童出版文化賞推薦。現在，定時制高校教諭，大学非常勤講師，教育相談委員。『教育の原型を求めて』（朝日新聞社）『子どもの心が見えるとき』（柏書房）などがある。

筑摩書房／1985年初版
222pp.／20cm／四六判

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

1985年10月30日　第1刷発行

著　者　菅（すが）　龍（りゅう）　一（いち）

発行者　布川角左衛門（ぬのかわかくざえもん）

発行所　株式会社（かぶしきがいしゃ）筑摩書房（ちくましょぼう）

東京都千代田区神田小川町 2-8
電話 東京（291）7651（営業）
（294）6711（編集）
郵便番号101-91／振替東京6-4123

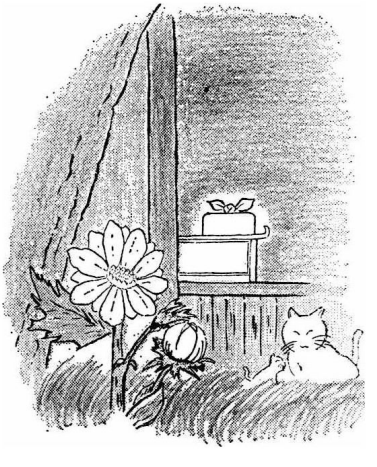
© R. Suga, Printed in Japan

厚徳社印刷・和田製本

（分類）8023（製品）04095（出版社）4604

乱丁，落丁本の場合は御面倒ですが，小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

親とたたかう



もくじ

序章　生徒にもらった宿題　5

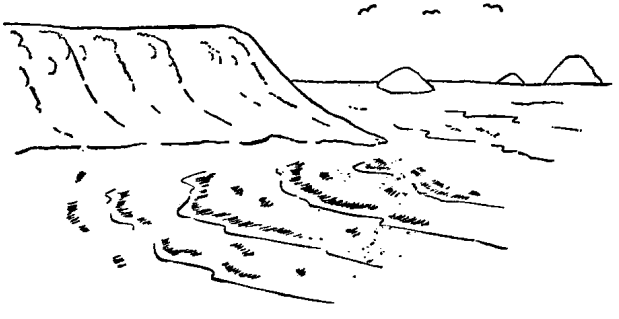
1　〝おまえの手で遺稿集を……〟　9

2　父の故郷をたずねて　31

3　宗教家への道　53

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

4 はじめての反抗 83
5 戦争責任を痛感して 121
6 父を打倒目標として 157
7 父の心を受けついで 191
終章 親の胸を借りよう 216
あとがき 221



装画・カット　目黒泰紀

序章　生徒にもらった宿題

親と子の間の凄惨な事件があいついでいる。両親を金属バットでなぐり殺した息子がいる。また、母親への暴力行為に手をやいた父親が、息子を殺す事件もつづけて起こった。まことに悲しいことだ。現代では、そんなに親と子の関係は絶望的なのだろうか。

だいぶ前になるが、生徒たちと家庭内暴力について話し合ったことがある。テストや受験において立てられて、親も子も心のゆとりをなくしているとか、核家族になって親が過保護になったとか、いろんな意見が出た。これらの議論をだまって聞いていたある生徒が、ポツリといった。

「みんな評論家みたいなこといってるよ。受験とか核家族なんてのは、事件の背景だろう。問題は、どうすれば親と子の気持ちが通じ合えるかってことだよ。それが親も子もわかんないから、家庭内暴力になるんだろう」

この一言で、活発に発言していた生徒たちはだまってしまった。気まずい沈黙を救うように、別の生徒が冗談めかしていった。

「どうすれば、親と子の気持ちが通じ合えるかって本を、先生が書いてよ。先生自身の具体的な経験をもとに、ぼくたちの心にとどくメッセージとしてさあ」

こうして、私はとんでもない重い宿題を出されたのだった。それ以来、頭の片すみにいつもこの主題があり、ときには大きく頭の中にひろがり、またときには片すみにひそむという状態がつづいた。

それにしても、これはたいへんな宿題だった。第一〈こうすれば、親と子の気持ちが通じ合える〉などという法則があるだろうか。どの親もどの子も、それぞれの個性があり、性格も考え方も感じ方もちがうのである。

つぎに、私自身の親との関係を反省すると、いつも気持ちが通じ合っていたなどと、とてもいえる状態ではなかった。私は父にも母にもしばしば反抗したし、父や母も私に負けてはいなかった。だが、私の教員としての営みや創作活動のなかには、父や母の生き方から受けた影響、父母の想いや願いが脈うっていることがよくわかるのである。私は、父や母のそうした心を受けついで生きてきたといえる。

そう考えると、私の親への反抗は意味があったのだということに気がついた。私は父や母と論争し、反抗し、和解しながら、父や母の心が理解でき、それを受けついできたのだ

った。つまり、両親の胸を借りることによって、親を知り、自ら育ってきたといえるだろう。

もともと子どもにとって、親とははじめて自分の前にあらわれる人間であり、生きるためのお手本でもある。幼いうちは、親を信じきってその胸に甘えていればよい。だが、やがて親は子どもにとって乗り越えるべき対象にも、時には打倒目標にもなる。子どもは成長するにしたがって、親の胸を借り、親に対立し反抗することによって、自分の力を試しながら、やがておとなとして自立してゆくのである。その論争、対立、反抗、和解などを通して、親と子は喜びと悲しみ、怒りと安らぎ、きびしさとやさしさなどの感情を分かち合う。こうした体験を共有することによって、子は親の心を受けつぐことに、私は気がついたのだった。

はじめに述べた親と子の凄惨な事件は、単なる対立や反抗の結果ではなく、子がほんとうの意味で親の胸が借りられなかったり、親が子に胸を貸すことができなかった結果生じた悲劇ではないか。喜びと悲しみ、怒りと安らぎ、きびしさとやさしさなどの感情を分かち合う共通の体験を持ち得なかったいらだちが、相手を抹殺する結果になったのではないか、私にはそう見えるのである。

私はようやく、あの〈宿題〉が果たせそうな気がしてきたし、今日の親と子の状況を考えるとき、それを果たさねばならないと決心した。本書は、このようにして出来た本であ

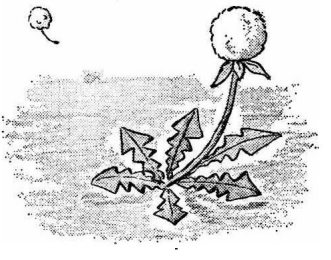
る。

あの宿題をくれた生徒は、いまは卒業して、りっぱな勤労青年になっている。この本をまず彼に届けたい。そして、世の多くの中学生・高校生・大学生・勤労青少年、そして出来れば親たちにも読んでほしい。彼がいったように、本書は、こうした人たちに対する私のメッセージである。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

1

〝おまえの手で遺稿集を……〟



良寛和尚のように

今から十五年前、一九六七年一月九日の朝、ぼくは一通の電報を受けとった。

「シヤクダ　イド　ウ、キトク、スグ　カエレ」

電文を読みながら、私は顔から血の気が失せていくのを感じていた。

〝シヤクダ　イド　ウ〟とは、ぼくの父・釈大道のことであり、父は山陰海岸にある貧しい禅寺の住職だった。

とるものもとりあえず、ぼくは新横浜駅から新幹線に飛び乗った。「生きていてくれ」と祈りながら、この開通して四年目の、世界一速いという列車のスピードが、遅く感じられてしかたなかった。

京都で山陰線に乗りかえ、綾部、福知山、城崎と進むにつれて、沿線に雪が見えるようになった。西に傾いた太陽の光にキラキラ輝いている。ところどころ黒い田んぼの土があらわれていて、雪と土とがまだら模様を見せていた。ぼくは、前の年父が読んだ短歌を思い出した。

まだら雪に大霜さだかならず日が射してわがととのわぬ生涯悲し

沿線の雪と土とのまだら模様が、この歌と符合して、ぼくはなぜか不吉な予感におのの

いた。「生きていてくれ」と、ぼくはまたつぶやくのだった。

この数年間、父は熱心に短歌を作っていた。そして、朝日新聞全国版の「朝日歌壇」や、兵庫県北部版「但馬歌壇」などに送っていた。全国版の選に入ったり、但馬歌壇で一位になったりすると、大喜びでぼくのところにその歌を書き送ってきた。

下水がめにいもり二匹があそびおり一人ぐらしに水すみおれば

雪どけの寺の流れに野芹つむ明日はひとり居の七草会にて

この歌でわかるように、父は禅寺でひとり暮らしていた。長男のぼくは神奈川県の高校の教師をはじめて十年目だったし、二男の弟も大阪府で教師をしていた。その下の妹は京都の大学に学んでおり、母は妹に学資を送るため鳥取市に下宿して女子高校の教師を続けていたのである。

兵庫県美方郡浜坂町の田井という部落の奥に、父が住職をしている楞厳寺という寺があった。部落の入り口を左に折れると、仏頂山楞厳禅寺と刻まれた石の柱がある。左手には小さな地蔵堂があり、六体のお地蔵さんが並んでいる。山門をくぐると坂になった参道があり、左手に塔中といわれる小さな寺が二つある。右手には松尾谷と呼ばれる仏頂山の谷から流れ出た小川があり、塔中二か寺の洗い場が作ってあった。

春は地蔵堂前の数本の桜が白く美しい花を開く。夏には、参道のさるすべりが可憐な花を咲かせ、苔むした緑のジュウタンの参道にピンク色の花びらを敷きつめる。秋にはカエデが色づく。冬になると洗い場をはさんだ小川の対岸にツバキの花が咲き、それが洗い場の水槽の中に落ちて沈んでいる。

参道の奥の石段を登ったところに天をおおうように枝を広げた大銀杏がある。多いときは米俵に何俵ものギンナンがとれる。そこが楞厳寺の境内である。広い庭の向こうに、ふつうの寺の本堂にあたる仏殿がある。右手にそまつな庫裡（住居）。この建物に父は住んでいる。ひとり暮らしなので炊事の水も汚れてはおらず、下水がめの中にイモリ二匹が住んでいたというわけである。

父の書院は、松尾谷と仏頂山が真正面に見えるわずか二畳の部屋だった。

原稿はなお半分に至らず「これからの宗教」出版の日まで命あれかし

仏教改革の著書成らずして三十年ぎんなん拾いも妨げの一つ

父は僧侶だから、村の人が亡くなれば葬式に出かけた。また、三回忌とか七回忌といった命日には、法事を営んだ。そうした住職としての仕事のないときは、この二畳の書院にこもって、ひたすら三十年来の著作『これからの宗教』の執筆にはげんでいたのである。

もう七十二歳になっており、執筆は遅々として進まなかった。米俵に何俵ものギンナンを降らす大銀杏がうらめしかったのだろう。なにせ、ギンナンの実は扱いがやっかいで、落ちたままにしておくと腐ってひどいにおいを放つ。これを拾い集めて、長靴をはいて踏みしめ、中の固い実を小川で何回も洗って乾燥させねばならない。そして、外側の果肉は、仏殿のまわりの竹ヤブに穴を掘って埋める。それは大変な重労働であった。

執筆や労働に疲れると、遠くにいる家族に手紙や葉書を書いた。とりわけ孫であるぼくの子どもたちには、よく手製の絵葉書をくれた。墨絵に水彩えのぐで色をつけ、歌や童謡が書きそえられた葉書だった。

孫のため絵も童謡もと思うゆえせがれへの手紙いつもおくるる

せがれとは、もちろんぼくのことである。ぼくが教育や宗教について手紙で議論をふっかけると、それへの返事がついおっくうになり、それよりもかわいい孫への絵葉書が先に書きたくなったのだろう。

ひとり住まいの父のもとに、訪ねてくる人たちも多い。その第一は、部落の子どもたちだった。

野球すと七福神に似たる子ら境内借りに来れば断わりきれず

ピンポンの子供をすかして経読ますあらくれの子はねころびて読む

仏殿の前の庭は広く、野球場にはもってこいの広さだ。竹ヤブの中にホームランを打ち込んでくれるぶんはまだよいとして、ファウルは仏殿のガラス戸をこわしてしまう。貸したくないという気持ちもあるのだが、ほていさんやえびすさんに似た子どもたちの顔を見ると、断わりきれない。

ついにだれかがガラスを割ってしまった。父はたまりかねて、仏殿の中で卓球をしなさいという。そのかわり、仏さまを拝んでからだよというわけだろう。父が鐘や木魚をたたき、やさしいお経、たとえば延命十句観音経という短いお経を教えるのだが、そこはやんちゃ坊主たちだ。「お経さえ読めば、ピンポンさせてくれるんだろう」とばかり、寝っころがって口をパクパクさせている。そんな子どもを慈愛深く見ている良寛のような父の姿が、目に浮かんでくる。だが、こんなこともあった。

特殊学級に入るほどの子と知らずして蟬ばかり捕るとたたきて悲し

部落や浜坂町の青年たちも、よく寺を訪れた。なかには、遠く大阪や東京からやってくる青年もいた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com